

## 聖霊シリーズ「奇蹟の賜物」

### 1A 神の力の働き

### 2A 聖書における現われ

#### 1B 旧約

#### 2B 新約

##### 1C 主ご自身

##### 2C 使徒たち

##### 3C 弟子たち

### 3A 今日の奇蹟

#### 1B 罪からの救い

#### 2B 人にある問題

##### 1C 私欲に用いる動機

##### 2C 理性

##### 3C 注意の散漫

## 本文

私たちは、聖霊シリーズの学びをしていますが、今晚は「奇蹟の賜物」について見ていきたいと思えます。「1コリント 12:10 **ある人には奇蹟を行なう力**」とありますね。私たちは、力の現れについての御霊の現れを見ました。信仰の賜物、癒しの賜物、そして奇蹟の賜物は互いに関連している賜物です。信仰がなければ、癒しや奇蹟は起こりません。そして癒しは、奇蹟の中の一つです。そして奇蹟については、癒しに留まらない神の奇蹟の全般を指しています。

### 1A 神の力の働き

ギリシヤ語において、「**奇蹟を行なう力**」は「力の働き」となっています。この力は、デユナミス、使徒 1 章 8 節で、聖霊が上に臨まれると力を受けると主が言われた言葉と同じです。つまり、神の力が信じる者たちに働かれることを、ここでは指しています。

創世記 1 章 1 節にて、「初めに、神が天と地を創造された。」という言葉があります。これさえ理解できれば、奇蹟があるということについて何ら抵抗や困難を覚えることはありません。思い出しますが、求道を始めた時に、図書館であるカトリックの神父さんの本を読みました。彼は神学部に入ったのでしょうか、けれどもまだ不信者でした。そして、神の存在を否定しようとする論文を書いていたそうです。ところが、彼は論文が完成しないうちに信仰を持ってしまいました！そして、「聖書に書かれたことだけでなく、奇蹟があることを信じるようになった。」と言っていました。つまり、聖書の奇蹟がその通り、実在してただけでなく、今日にも奇蹟があるということ信じられるようになったということです。私もそのような経験があります。多くの人が、聖書が神の奇蹟を証言する

書であることに抵抗を覚えます。しかし、この世界が人の理解できることだけで成り立っていると考えること自体が、私にとっては無理がありました。そんなはずはない、と強い拒否感が出ました。

この世界には、様々な自然法則があります。例えば重力の法則があります。そのために、物は地面に落ちます。けれども、重量の法則に対抗するかのように、巨大な鉄の塊であるジェット機が、空を飛びます。それは、空気力学というまた別の法則が働いており、それによって一件、重力の法則を無視し、対抗しているかのような現象が起こります。私たちは、それを奇蹟だと思いません。けれども、多くの奇蹟の業を行った使徒パウロが、ジェット機を見たら、これこそ奇蹟だと思うことでしょう。ただ、その時代にこの法則が発見されてなかったことだけです。

私たちには、すべての自然法則が知られている訳ではありません。ですから、ある現象は私たちには奇蹟に見えます。しかし、神はすべての自然法則の支配者です。私たちの理解をはるかに超えることを行なうことができます。そして、神は一時的に、自然の法則を中断することもおできになります。そうすると奇蹟を行なうことができになります。例えば、イエス様が水の上を歩かれた時に、重力の法則をその時、止められました。そしてペテロがイエス様を見て歩いた時も、止めておられました。ところが、風を見て怖くなった時は、その法則を戻されました。このようにして奇蹟を起こすことが、神にはおできになります。

その奇蹟が可能か不可能であるかを推し量る時に、その奇蹟を行なっている行為者が誰であるかによって量るべきです。神がその行為者であれば、その難しさを論じることは愚かなことです。パウロが、ユダヤ教に改宗していたヘロデ・アグリッパ二世にこのように告げました。「使徒 26:8 神が死者をよみがえらせるということを、あなたがたは、なぜ信じがたいこととされるのでしょうか。」死者を甦らせるのが人ならそれは不可能な業ですが、神は元々、人に命を与えられた方です。であれば、死者を甦らせることも容易に行われるのです。神はご自分が神であることを、聖書の初めから終わりまで、一貫して奇蹟によって示しておられます。

## **2A 聖書における現われ**

### **1B 旧約**

天地創造の後に、モーセの生涯に神の奇蹟の証しがありました。エジプト人は、川が血に変わった姿を見ました。蛙がナイル川から這い上がり、台所にまで、寝床にまでやってきたことを知っています。そして土地の塵がぶよになりました。数々の恐るべき徴が起こりました。紅海が分かれ、岩から水が出て、天からマナが降りてきました。これらはみな、神が確かに天地創造の主であることを証しています。それを、神はモーセを用いられて示されました。

そして預言者の筆頭であるエリヤにも、神は奇蹟によってご自身をイスラエルの民に現されました。エリヤが祈ると雨が降らず、三年半経ちました。そしてまた祈ると雨が降りました。干ばつの間、寡のところに行き、食べ物くれるように頼みました。そして、その粉の瓶と油の壺から干ばつが

終わるまでなりません。主は、命を支え、備えられる方ですね。そして彼女を息子が死んでしまったのを生き返らせます。また、バアルの預言者との対決の時に、祭壇に何度も水をかぶせ、それで火を降らせて、すべて燃え尽くしました。そしてエリヤのところに、彼を捕えようとして来た五十人を焼き尽くしました。

そしてエリシャが、「あなたの霊の二倍の分け前をください」とエリヤが天に引き上げられる前に願いました。確かに、エリヤよりも大きい奇蹟を行ないました。エリシャは、ヨルダン川をエリヤの外套で叩き、それで川の水が堰き止められました。また、彼はやもめと子供たちのために、多くの空の器を持ってきなさいと言いつけました。そして油を壺に注いでも、すべての空の器に注ぎ入れることができました。そして、エリシャは水が悪質になっているエリコの泉を塩によって清め、それを癒しました。そして、シェネムの女の息子を生き返らせました。そして、預言者のともがらが、ヨルダン川のそばで木を切っていた時に、その斧が外れてヨルダン川に落ちましたが、そこに木を入れて、斧の頭が浮きました。そしてナアマンのらい病からの癒しがあります。

そして預言書を読みますと、イザヤを通してヒゼキヤ王が致命的な病が癒されるという奇蹟がありました。そして日時計が戻るという奇蹟がありました。ダニエルは獅子の穴から救い出されました。旧約聖書は奇蹟に満ちています。

## 2B 新約

### 1C 主ご自身

神は、旧約時代だけに奇蹟を行なわれただけではありません。イエスご自身が神から来たことを証しされるために、数々の奇蹟を行われました。カナの婚礼で、水をぶどう酒に変えられたのは、その徴の始まりです。遠い所から王室の役人の息子を癒され、ナインでは死んだ寡の息子をよみがえらせ、死んだヤイロの娘を生き返らせ、死んで四日も経っているラザロを蘇らせました。そして、五つのパンと二匹の魚によって、五千人の男に食事を与えられました。

このような事柄を、そのまま神が、ご自身がおられることを証しされるために起こして下さっていることを認めず、「そんなことはないはずだ。」と我々はしてしまいます。それが、キリスト教の教師と呼ばれている者たちの間でも実はあるのです。私は信仰が新しい時に、この五千人の給食について、あるバークレーという聖書注解者の解説を牧師が説明しました。それは、こういうものです。「その当時、人々は裾まで垂れる長いゆったりした着物を着ていて、その中に少しパンやチーズを持ちながら歩くことがあった。そして夕暮れになって、人々が空腹になると、食べるものがなかったが、そこでは買うことはできない辺鄙なところだったので、「何か食べる物はありませんか。」と尋ねられた。けれども、みな身勝手に、自分たちの袖はしっかりと閉じて、自分の食べ物をあげる気はさらさらなかった。ところが、男の子が自分の持っていた五つのパンと二匹の魚をイエスのところに持ってくるのを見ると、その模範にいたく感動し、自分たちの袖をほどいて、自分たちの持っていたパンと魚を取り出した。」このようにして、奇蹟の要素を排除しようとする。神が自然の法則

を一時期、止められて、ご自身が創造主であることを証しされているのに、どういうわけか自分の理解できる自然法則の中でしか神が働くことができないと考えるのです。

### 2C 使徒たち

そして、奇蹟を行なう力はイエス様に限られたものではありませんでした。イエス様から天からの権威を授けられた十二使徒たちは、奇蹟と不思議を行なう力が与えられました。もし使徒行伝から奇蹟を抜いたら、ほとんど話にならないぐらいページ数が減ってしまいます。それもそのはず、パウロがこう言っています。「2コリント 12:12 使徒としてのしるしは、忍耐を尽くしてあなたがたの間でなされた、あの奇蹟と不思議と力あるわざです。」奇蹟の賜物は彼らがイエス・キリストの使徒であることを証明する資格であったのです。パウロの使徒の権威を攻撃していた者がいたので、彼は自分の行なっている奇蹟を証拠として主張したのです。

### 3C 弟子たち

そして奇蹟の賜物は、使徒たちだけに限られたものではありません。パウロがダマスコに行く途上で、復活の主に会いました。そして、ダマスコにはアナニヤという弟子がいました。使徒ではなく、一人の弟子です。主がアナニヤに対して、「サウルという人を尋ねて、シモンの家に入るように、彼は祈っているから。」と語られました。アナニヤは、「主よ。このサウルという人物は、エルサレムにある教会で酷いことをしたことを聞き及んでいます。そしてダマスコにも、あなたの御名を呼び求める者たちを捕縛するために、エルサレムから遣わされたのです。」と言いました。けれども主は、「彼は、わたしの選びの器です。」と言われたのです。それでアナニヤはパウロのところに行きました。そして、パウロの目が見えるようになり、聖霊に満たされるように、と祈り、また手を置いたら、サウルの目から鱗のようなものが落ちて、目が見えるようになりました。

そして、食卓に仕える者たちの中に、ピリポがいました。彼はキリストを宣べ伝えるためにサマリヤに行きました。ピリポの話聞き、その行なっていた徴を見て、驚いていたとあります。さらに、ステパノも給仕していた者でした。「使徒 6:8 さて、ステパノは恵みと力とに満ち、人々の間で、すばらしい不思議なわざとしるしを行なっていた。」とあります。ですから、十二使徒はイエスからの権限を受けた使徒たちであることの資格として奇蹟の賜物が必要条件でしたが、そうでない弟子たちにも奇蹟の賜物が与えられていた人たちがいました。

## 3A 今日の奇蹟

そこで私たちは一つの疑問にぶち当たります。それは、「今日も神は奇蹟を行なわれるのだろうか。」という問いです。神が今日も生きておられるならば、聖書時代と同じように奇蹟を見ることができるはずですが。奇蹟が終わることはあり得ないです。

### 1B 罪からの救い

まずその問いに答えるために考えなければいけないのは、罪からの救いそのものが神の奇蹟で

す。「マタイ 19:24-26 まことに、あなたがたにもう一度、告げます。金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」弟子たちは、これを聞くと、たいへん驚いて言った。「それでは、だれが救われることができるのでしょうか。」イエスは彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。」らくだが針の穴を通るより、金持ちが神の国の入るのが難しければ、その救いはまさしく奇蹟です。

ですから、私たちは神の奇蹟を目撃する共同体であります。イエスの名を呼び求めることによって、御霊によって新しく生まれ、その人生が変えられます。そのような証しは数限りなくあり、神は確かに今も奇蹟を行なわれることによって、私たちは神が今も生きておられることを確認することができます。

## 2B 人にある問題

しかし、旧約時代から新約に、そして使徒たちと弟子たちに受け継がれた奇蹟を行なう力は、今の私たちに受け継がれているのでしょうか？ 残念ながら、その通りであると断言することができません。かつての初代教会のような数々の奇蹟は、今日の教会でそれほど頻繁に見るものではありません。そこで問わなければいけないのは、「これは神のせいではない。」ということです。奇蹟が以前のように起こらないことが、何か神が方法を変えたであるとか、いろいろな理屈で説明してはいけません。神は今もこの賜物を用いる人を起こすことを願っておられます。しかし、そうっていない、それを妨げている人間側の問題を取り上げなければいけません。

## 1C 私欲に用いる動機

一つは、私欲のためにこの賜物を用いようとする人々がいるということです。神が生きておられることを証しするための賜物が、自分が金銭を得るための手段としている者たちが数多くいます。「2ペテロ 2:3 また彼らは、貪欲なので、作り事のことばをもってあなたがたを食い物にします。彼らに対するさばきは、昔から怠りなく行なわれており、彼らが滅ぼされないうままでいることはありません。」事実、数多くの方が、「奇蹟の集会」などと呼ばれているもので、インチキであることを証言しています。舞台上、酸素ボンベを取り外して、癒しが起こったというということで、舞台裏に行くと、その酸素ボンベはその主催者からの借り物だった、というものです。そして、そうした奇蹟を行なうと言われる者たちが、献金によって金持ちになっているということがあるのです。あまりにも、そのような者たちが多いため、人々が奇蹟のような出来事を見ても、それで神がおられることを信じるように導かれないのです。

そして、神に奇蹟によって用いられると、神をほめたたえるのではなく、その器をほめたたえる誘惑がやって来ます。そして実に、奇蹟を行なうとされる多くの者たちがその誘惑に陥りました。使徒たちも、そのような危機がありました。38年間足なえの男をペテロがイエスの御名によって立たせた時に、人々はペテロとヨハネを見つめました。けれども、ペテロはこうきっぱりと言ったのです。「使徒 3:12 イスラエル人たち。なぜこのことに驚いているのですか。なぜ、私たちが自分の力

とか信仰深さとかによって彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですか。」つまり、ペテロは、「兄弟たち、何でこんなことに驚くのですか？私たちの父祖、イスラエルの神は、こんなことができないとも思っているのですか？私たちが、何か良い行いをしたかのように、なぜ私たちを見るのですか。」と言ったのです。そしてすぐにイエスが何を行なわれたかを宣べ伝えました。

同じようにパウロとバルナバにも起こりました。生まれつき足なえで歩いたことがなかった人をパロは立たせたところ、ルステラの人々は「神々がお降りになったのだ。」と言って、パウロをヘルメスに、バルナバをゼウスにして彼らにいけにえをささげようとしてきました。二人とも、「こうやって注意を引き寄せたから、とりあえず受け入れておいて、それで神を信じてもらうことにするか。」とも考えられたはずですが、けれども、彼らは自分の衣を裂いて抗議して、こんなことをしないように、天地を造られた神が私たちに恵みを与えておられることを私たちは伝えていると言いました。事実、単なる人間だということを言われて興ざめた人々の中に、扇動されてパウロを石打ちにした人々もいたのです。ですから、私欲や野心を心に持っている限り、神はこの奇跡を起こさないようにしているのかもしれない、ということがあるかもしれません。

この前、沖縄での男性修養会で、ある兄弟が以前、通っておられた教会のことを話してくださいました。そこでは癒しや奇蹟が頻繁に起こる教会でした。その修養会の後でその娘さんに会うことができましたが、彼女も「幼い時からそうだったから、それが当たり前だと思っていた。」と証しておられました。けれども、その教会から出てきて分かったことがあるそうです。聖書の言葉ではなく、その牧師の言葉を信じていた、ということです。奇蹟の賜物が用いられるようになると、キリストではなく人に栄光をもたらすという人の弱さがあるのです。それで主が願っておられるように、この賜物が生かされないのです。

私たちは、ぜひ奇蹟の賜物を求めていきたいと思えます。しかし、フィラデルフィアにある教会に対するイエス様の言葉にも注目したいと思います。「黙示 3:8 あなたには少しばかりの力があって、わたしのことばを守り、わたしの名を否まなかったからである。」少しばかりの力だ、ということです。それが、終わりの日に生きる教会の姿の一つであります。ですから、私たちの心は弱く、また悪く、それで奇蹟の御業が行われたらそれによって人に栄光が与えられ、私欲のために使われていってしまうということがあります。奇蹟は求めたいです、しかし、それ以上に私たちにへりくだりの心を与えられることを求めたいです。

## 2C 理性

もう一つの妨げは、私たちの理性です。私たちは幼い時から、神の奇蹟を信じないように教えられています。その思考からなかなか抜け出せないのが、奇蹟は起こりようがないと決めつけてしまっています。例えば、自動車のバッテリーが上がっていたら、エンジンは動かないことを私たちは知っています。けれども、次のように祈れるでしょうか？「エンジンをスタートさせてください。」スタートするはずがないのです、けれども神はエンジンを回復されることはあるのです。

イエス様は、神が生きておられるということを信じることができない時代が来ることを教えておられます。「ルカの福音書 18:8 あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます。しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」私たちは、自分にある限界を神のほうに持っていき過ちをしばしば犯します。頭痛のために祈って、その祈りが聞かれないなら、風邪薬を飲むことができます。だから祈りも大して真剣ではありません。けれども、末期がんに罹っている人がいたとして、その人のために祈るなら、私たちの祈りは真剣になります。主よ、どうか癒してください！と叫びます。そうして祈りの真剣さが変わってしまうのか？それは、私たちにとって薬で風邪は直るもの、そして末期がんは現代医療で直せないもの、という考えがあるからです。神は人数が少なくても、多くても、同じように敵を倒すことができるのですから、風邪を神が直すのと、癌を直すのとではその間に大きな違いがないのです。

このように自分の限界を神のところに持っていき傾向があるために、私たちは願うことさえしないという過ちを犯します。それで、奇蹟を見ることも少なくなります。

### 3C 注意の散漫

最後に、三つ目の妨げとして、「神との関係の浅さ」があります。現代人と聖書時代の人々との圧倒的な違いは、「私たちを神から注意を逸らすもの」が今の時代は圧倒的に多くなっていることです。イエス様は、終わりの日は不法がはびこるから、多くの人の愛が冷えると言われましたが、確かに情報過多によって人々が皮肉っぽくなり、自分中心にしか考えられないようになっています。神の愛に自分を留まらせる、その機会が少なくなっているのです。思い煩い、富の惑わし、また自分を高ぶらせる知識や情報が非常に多くなっています。

私たちが主との時間を持てなくさせるようなもの、祈りを妨げるようなものは、テレビ、電話、パソコン、スマホなどたくさんあります。そして、自己啓発系の書物、テレビ番組、ものすごくたくさんあります。そして利便性を追求しているので、不便の中にある祝福を忘れていきます。例えば、パウロの書いた手紙には、教会の人々について神の前に覚えて昼も夜も祈っていると言っていますが、それは彼は宣教旅行が、徒歩あるいは船であったから可能だったのです。歩いている時に、スマホはありませんでした。だから、たっぷり時間がありました。その間に祈っていたことでしょう。ですから、そうした神の声をもっと聞ける環境が私たちよりもはるかにたくさんあったのだと思われる。

神から聞くこと、神に拠り頼むことができにくくなっている社会の中では、奇蹟の賜物が働きにくいということが言えるでしょう。しかし、神は働いておられます。私たちは奇蹟を期待することができます。よりすぐれた賜物を熱心に求めなさいと主は言われました。それが、奇蹟の賜物である場合もあるでしょう。確かに奇蹟によって、多くの人が聖書では信仰に導かれているし、そして現代でも奇蹟によってイエス様を信じた人々は、日本では少ないかもしれませんが、発展途上国では数多く観察できます。こうした聖霊の働きを求めましょう。